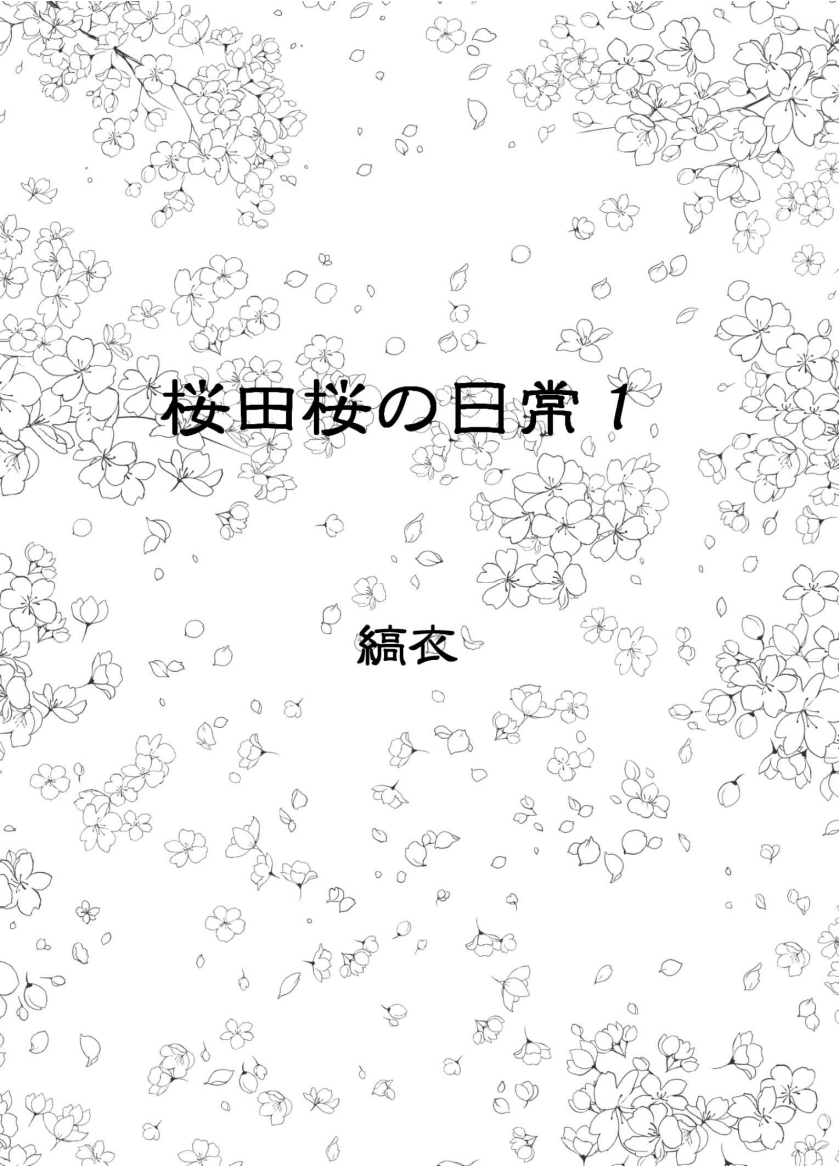




桜田桜の日常 1

縞衣

もくじ

登場人物紹介	03
豚か鶏か	04
ミートボール	06
料研の入部規則と部活模様	11
部長と窓ドン	23
サクラ君はムードメーカー	40
料理は好き、でも一人で食べるのはやっぱり寂しい	50
色気より食い気	55
部長の怒りとその理由	65
追いかけてっこと、告白と	75
あとがき	90

登場人物紹介

さくらださく
桜田桜

主人公。『早く自立する事』が目標。
実家からは通えない高校を選んで進学し、
一人暮らしを始めた。
料理研究部に所属。

かつらせな
葛晴夏

料理研究部部長。三年生。
容姿端麗、成績優秀だが
性格に一癖あり。

りんこ

凛子…料理研究部副部長。二年生。
おっとりしたもの言いながら、
言うべきことはハッキリと言う性格。

ななや

七屋…料理研究部の数少ない男子部員。二年生。

なかせ

中瀬先生…料理研究部の顧問。
女子バドミントン部と掛け持ちで担当。

くわお

桑尾…バスケ部に所属。

はなおか

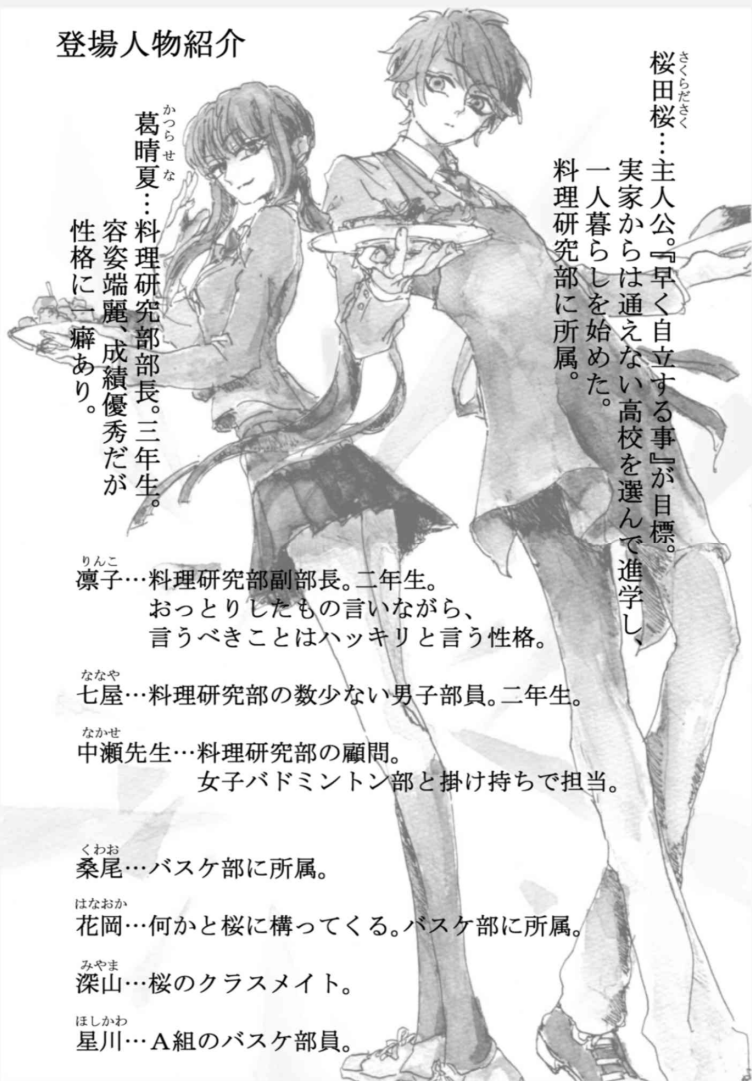
花岡…何かと桜に構ってくる。バスケ部に所属。

みやま

深山…桜のクラスメイト。

ほしかわ

星川…A組のバスケ部員。



豚か鶏か

桜田桜は、悩んでいた。

豚肉にするか、鶏肉にするか。

ここは、近所にあるスーパー、『いつもフレッシュ館』。

『いつもそばに！ あなたの暮らしをフレッシュに！』がキャッチフレーズのスーパーだ。

豚のミンチは、外国からの輸入品。鶏のミンチは、国内産。値段は、ほぼ同じ。

（うーん…悩むなあ）

一分ほど悩んで、結局、鶏ミンチに決めた。国内産だし、豚肉より少し安かったからだ。

桜は、最近一人暮らしを始めた高校一年生だ。

食べ盛りも真っ盛り、食い気たっぷり男子高校生には、『いかに安くおいしい物を食べるか』は、実に切実な問題である。

たとえ十円の違いでも、十回分たまればジュースが一本買える！
そう思えば、自然と節約してしまうものだ。

桜の目標は、『早く自立する事』。

その為に、わざわざ実家からは通えない高校へ入学し、アパート暮らしを始めた。

学校までは、徒歩十分。帰宅時には、スーパーにも寄れる。

よくもまあ、こんなに条件の揃ったいい部屋があったものだ！

桜は、まだ始めて間もないこの暮らしに、大満足していた。

（学校帰りにスーパーなんて、自立してるって感じ！）

（ミンチの種類で悩むなんて、主夫っぽい！）

そんな事で喜べる桜は、素直なかわいい高校一年生だ。

ミートボール

「お前の弁当、美味そうだな」

昼休み、昼食タイム。桜の弁当をのぞいて、深山がそう言った。

「そうか？」

料理を始めて、まだ一ヶ月。お世辞にも、上手いとは言えないと思うのだが。

「そのミートボールくれ」

「いいけど、昨日の残り物だぞ」

『いつもフレッシュ館』で買った鶏肉で、昨夜作ったものだ。鶏だからあっさりしているし、口に合うかどうか。

「美味い」

しかし食べた深山は、意外にも満足そうだった。

「これ、普通のミートボールと違うな？」

「鶏だからあっさりしてるし、揚げたんだよ。出来立てはまあまあだったけど、今日になったらイマイチだろ？」

「いや、コンビニで買う安物のカツサンドのカツに比べたら断然いい。あれあんまり好きじゃないけど、肉食いたいから食べてんだ。あれよりこっちがいい」
「ふーん、そうか」

まあ、一応は手作りだからって事か。

「て言うかさ。なんかさっき…」

深山が何か言いかけたところで、購買部へ買い出しに行っていた数人が戻ってきた。

「遅かったな」

桜が声をかけると、「先輩とちょっと話し込んでさ」と花岡。

「お、美味そうなミートボール」

言うなり、花岡は桜の弁当に手を伸ばした。

「おい」

勝手に食べるな、という非難を込めるが、花岡はお構いなし。

「うまっ」

「だろ？ 味がいいよな」

深山も同調するが、そんなにいいか？

「そうか？ ただレシピ通りにやっただけだぞ」

「えっ、まさかサクラが作ったのか?!」

「そうだよ。だって俺」

一人暮らしたし、という桜の声は、「ええええ?!」という数名の友人達の声でかき消された。

「お前、料理上手かったのかよ!」

「いや、まだ始めて一ヶ月だけど」

「一ヶ月う?! たったそれだけで、揚げ物とかできるようになるの?!」

「それは、料理研究部に入って練習してるから…」

「お前、そんな部活に入ってたっけ?！」

大騒ぎする友人たち。

彼らがそれを知らないのも、無理はない。大笑いされると思って、黙っていたのだから。

「料理研究部…女ばっかじゃないの?」

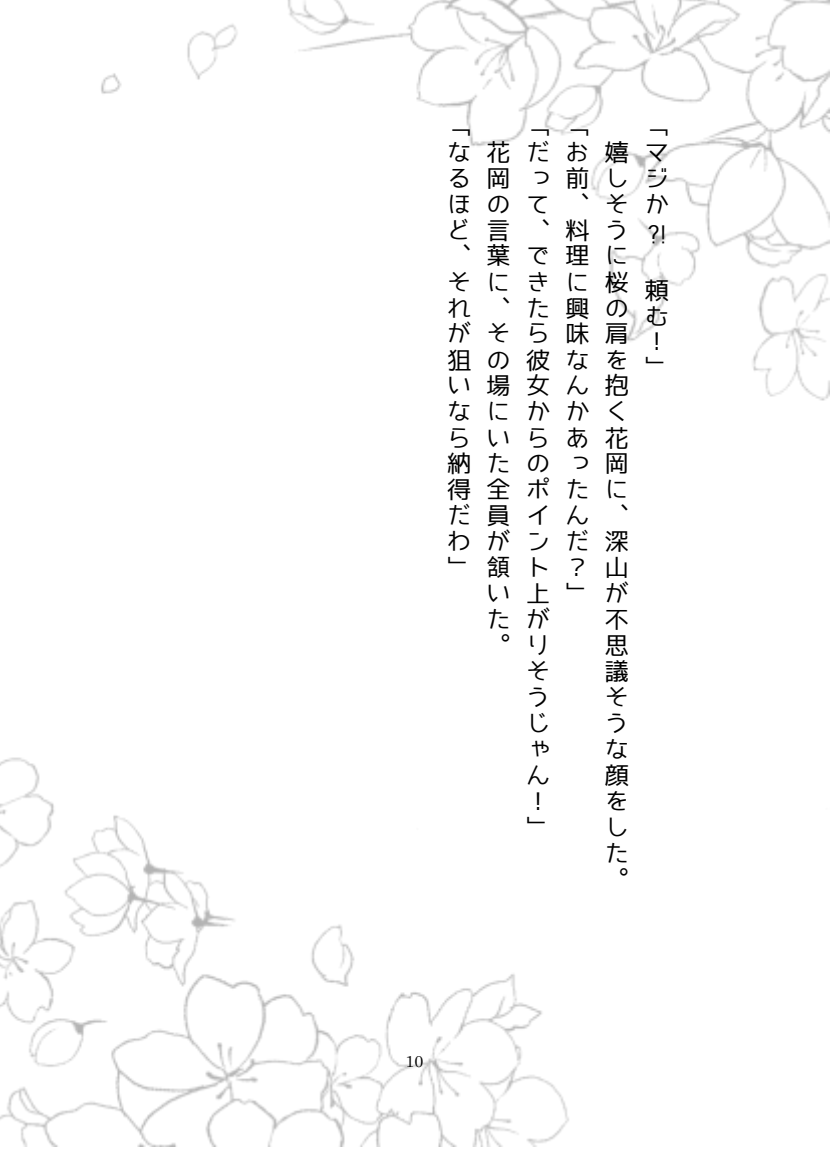
「いや、男の先輩もいるよ。最近、男性の間でも料理教室ブームになってるらしくて、お父さんが教室に通い始めた影響で自分も始めたって言ってた」

「へへ」

「こんなの作れるようになるんだったら、俺も入ろうかな……。兼部でもいいのか?」

花岡が、桜の弁当をジッと見ながらそう言った。

「興味あるなら、聞いてやるよ」



「マジか?! 頼む!」

嬉しそうに桜の肩を抱く花岡に、深山が不思議そうな顔をした。

「お前、料理に興味なんかあったんだ?」

「だって、できたら彼女からのポイント上がりそうじゃん!」

花岡の言葉に、その場にいた全員が頷いた。

「なるほど、それが狙いなら納得だわ」